

---

# 王子様見つけた！

瀬戸美月

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

王子様見つけた！

### 【Nコード】

N2808E

### 【作者名】

瀬戸美月

### 【あらすじ】

無実の罪で店を追われたホストの未知人<sup>みちと</sup>は店の前で見知らぬ外国人美少女エリザに出会う。未知人のことを王子様だと言い張る少女に辟易していると突然黒服集団が現れ、わけもわからずふたりで逃亡するはめに。エリザの懇願とある遊園地に来た未知人はふと昔のことを思い出すが……。ドタバタ トーキョーの休日。無邪気で強引な少女に振り回されるオラオラ青年の戸惑い。ファンタステイック・コメディ。

王子様見つけた！

王子様見つけた！

「ここだ……」

手にしたメモと店名表示を何度も見比べ、少女は小声で呟いた。そんな少女の姿に通行人が奇異な視線を向けたのも無理はない。

ここは首都最大の歓楽街。それもちょっと名の知れたホストクラブの真ん前なのだ。

そして佇む少女はどう見ても小学生。

ただでさえそぐわない取り合わせなのに、加えて少女は明らかに日本人ではなく、金髪碧眼の西洋人なのであった。

少女は白い頬を紅潮させ、もう一度店名を確かめた。

Jail of Jewels と、ライNSTーンを散りばめた飾り文字がライトに照らされて はいない。ライトは消えていた。

今は朝の九時半。微妙に中途半端な時間だ。ネオンサインもライトも消えているのだから、たぶん今は営業時間外なのだろう。

しかしここで諦めるわけにはいかない。少女が意を決し、一歩踏み出したその時。

鉄打ちされた重厚なドアが開き、中から男がひとり情け容赦なく蹴りだされた。せいぜい二十代半ばの青年だ。彼は猛々しく眉を逆立て、無骨な銀のリングをはめた手で口の端をぬぐい、立ち上がった。殴られたのか、口の端が切れて血がにじんでいる。

続いてドアの向こうから数人の男たちが現れ、青年と激しい口論を始めた。どうやら蹴りだされた青年は、店の金を盗んだ疑いをかけられているらしい。

無実を主張して食ってかかる青年をあざ笑い、警察に突き出されないことを感謝しろなどと恩着せがましく言つて、男たちは青年の鼻先でぴしゃりと扉を閉ざした。

青年は血の混じった唾を吐き、その辺に転がっていた空き缶を腹

立ち紛れに蹴飛ばした。八つ当たられた空き缶は、昔のヨーロッパの牢獄を模したらしい鉄ビョウ付きの扉に跳ね返って虚しい音をたてた。

鼻息も荒く扉を睨み付け、青年は踵を返した。それまで棒立ちになつていた少女は、青年に向かって急いで手を伸ばした。

（くそつ、まさかこんな汚い手を使って追い出されるとは思わなかつたぜ。）

どうやってリベンジしてやるうかと考えた途端、いきなり足が動かなくなった。バランスを失った未知人<sup>みちひと</sup>は路上にばったり倒れた。

罵声を上げながら身を起こすと、至近距離から金髪碧眼の少女が自分を見つめている。未知人はわけがわからず目をぱちくりさせた。

（何だ？ 何だ？ 何だ!? こいつは!?!）

「……見つけた」

少女は、ごく自然な抑揚の日本語で呟いた。呆氣にとられたまま見返すと、少女は潤んだ瞳をキラキラさせ、感極まった様子で未知人にぎゅゅつと抱きついたのであった。

「見つけた、王子様！」

「……はいい？」

未知人は焦って少女を引き剥がした。自分を見上げる少女の目鼻だちは明らかに西洋人だ。金髪碧眼もウィッグやカラコンではない。仕立てのよいローズピンクのコートに編み上げの黒いショーツブーツ。くるくる巻き毛に天鵞絨のリボン。いったいどこのお嬢様だ。……あのな、俺は王子じゃなくてオラオラ系で売ってんだけどよ。王子系も何人かいるけど、うちは日の出営業はしてないから夜中過ぎに出直して来な。って、どう見ても十八歳未満だよな、おまえ。幾つだ」

「うーんと、九歳」

王子様見つけた！

王子様見つけた！

「九歳！？ ここらはファミリー向けの観光地じゃねーぞ。親はどうした親は」

「お仕事」

「他に連れはいねえのか」

少女は大きく首を横に振った。未知人は地面に座り込み、溜め息をついた。

「迷子かよ……。まったくしゃーねーなあ。こっち来い」

立ち上がった未知人に、少女は無邪気な瞳を向ける。

「どこ行くの？」

「交番だよ。KOBAN。知ってるだろ、ポリスがいるところ」

「いやっ」

少女が勢いよくしがみついたので、未知人はまたもや路面にダイブしそうになった。

「何なんだよてめえはっ」

「ポリスに捕まったら殺される！」

「なんで警察に捕まって殺されんだよ。日本はいちおう法治国家なんだぞ」

辟易した未知人は少女の襟首を掴み、有無を言わせず歩きだした。何やら外国語で抗議しながらバタバタ暴れていた少女が不意に動きを止める。見下ろした未知人は少女のこわばった表情に眉をひそめた。

視線の先をたどると、そこには黒いスーツにサングラスをかけた数人の男がいた。離れた場所からでも胸板の厚さが見て取れるような、屈強そうな男たちだ。どう見ても営業中のサラリーマンではない。

未知人が無意識に手をゆるめた隙を突いて少女は脱兎のごとく走り出した。

同時に黒服の男たちもまた少女に気付き、何やら外国語で叫んだ。英語ではないことくらいしか未知人には理解できなかったが、殺気立った気配はわかる。

男たちがこちらへ向かって大股に歩きだすと同時に未知人は向きを変えた。先に逃げ出した少女は懸命に走ってはいたが、どだいコンパスの長さが違う。あっというまに少女に追いつき、未知人は怒鳴った。

「ありや何だ！？ マファイアか、ヤクザか！？」

青ざめた少女は泣き出しそうに顔をゆがめ、絶望的な声音で呟いた。

「殺されちゃう……」

未知人は肩ごしに追手を振り返り、少女の襟首を掴んだ。

「畜生めえつ、来い！」

未知人は店と店の間の細い路地に駆け込んだ。怒鳴り声と錯綜した足音が背後で派手に上がる。振り向くと追手の男たちは憤怒に顔を赤くしながら追いかけてくる。外国語で何やら叫んだ後、男は日本語で怒鳴った。

「待て、止まれ！」

未知人はとある店の裏口に置いてあったゴミ用のポリバケツを駆け抜けざまに蹴飛ばした。後方で怒声と派手な物音が上がる。未知人は少女の手を引いて路地を飛び出すと、少し走ってまた別の路地に飛び込んだ。

唸りを上げるエアコンの大型室外機の陰に身をひそめると、少女も心得た様子でびったり壁に張りついた。

やがて何組もの革靴がアスファルトを蹴る音と腹立たしげな怒鳴り声が路地の入り口から聞こえてきたが、奥まで入り込んで来なかった。

そのうちに外国語で呼び交わす声が遠くなり、いつもの雑踏が戻ってきた。未知人は室外機に寄り掛かり、へたへたと地面に座り込んだ。

「……つたく、何なんだよあいつらは」

「ごめんなさい……」

しゅんとした様子で、少女が未知人の前にしゃがみ込む。未知人

は溜め息をついた。

「おまえいつたい何者？ おまえみたいなガキが、あんなヤバそうな連中に追いかけられるなんてさ……。おまえ、マフィアの娘か何か？ それとも大使のお嬢さんとか？ 映画でよくあるよな、セレブの娘が誘拐されたりする奴。ひよつとしてあのたぐいかよ」

「……ごめんなさい」

「別にあやまんなくてもいいけどよ。警察行った方がいいんじゃないの。日本の警察もいろいろ問題はあるけどよ、いくら何でもマフィアとつるんではないと思うぜ」

「……行きたいところがあるの。そこ行けたら、KOBAN行く」

「行きたいところ？ どこだそれ」

「連れてつてくれる？」

「後でおとなしく警察に行くって約束するならな。どーせ仕事もクビになってヒマだしよ……。あつ、あんまし遠くはダメだぜ。俺、そんなに金ねえし」

「約束する。後でちゃんと警察、行く」

未知人は立ち上がり、コートについた埃を軽く払った。

「で？ どこ行きたいんだ？」

「花やしき」

「はあ？ 花やしき、ってアレか。浅草にある遊園地の……？」

「うん」

「何でそんなところ……。デイズニーとかじゃなくて？」

「デイズニーシーも行ってみたいけど、今は 花やしき に行きたいの」

「……別に俺は構わねーけどよ。花やしきの方が近いし安いし。んじゃ、行くか」

少女は満面の笑顔で自分から未知人の手を握ってきた。

「そう言えばおまえ、名前何ての？」

「エリザ」

「どっから来たんだ？」

「ひ・み・つ」

「そーかよ……。俺は未知人」

少女は頷き、噛みしめるように繰り返した。

「ミチト。王子様」

「だから俺はホストだつっの。こんなガラの悪い王子がいるわけねーだろ」

「ミチトは王子様なの」

「は、さいですか」

妙にきつぱりと言い放つ様子に肩をすくめ、未知人は少女の手を引いて陽の射さない路地裏からようやく抜け出した。

三月最初の土曜日で、遊園地は早くも賑わっていた。晴れ渡った空から降り注ぐ陽光がやけに眩しい。

ふだんは夜明けまで働いてそれから寝るので、起床は昼をだいぶん過ぎてからになる。

さすがに眠気がさして未知人は盛大に欠伸をした。殴られた口許が痛み、思わず顔をしかめる。あざになっているに違いない。

「ミチト、ねえ、あれ乗りたい」

はしゃいで周囲を見回していたエリザがつないだ手を引いた。エリザは園内をぐるりと回る高架を指さしていた。海賊船をかたどった乗り物がレールからぶら下がっている。

「はいはい」

未知人は肩をすくめ、手を引かれるまま後に従った。

空飛ぶ海賊船を手始めに、メリーゴーランドだの何とかタワーだの、次から次へと引き回され、徹夜明けでしかも仕事柄かなり酒を飲んでいた未知人は気分が悪くなってきた。

「次はあれ！ あれに乗りたい」

対照的に元気一杯のエリザが示す方を見ると、今度はローラーコ

王子様見つけた！

「スターだった。」

「……ダメだなこりゃ。身長制限がある。110センチ以上ないとダメだよ」

「あるもん！ ほらっ」

「カカト浮いてんだろーが。他のにしろ他の。ほれ、あのティーカップとかどうだ」

「あんな子どもっばいのなんてイヤ」

「ガキのくせにナマ言うんじゃねえ」

時速42キロのコースターでも、今の状態ではなるべく乗りたくない。未知人は未練たつぷりのエリザを、くるくる回る巨大なティーカップ乗り場に強引に引きずって行った。

この選択がとんでもない間違いだったことに気付くのにそう時間はかからなかった。乗ったら乗ったで喜んでいるエリザを横目に、未知人は眩暈と吐き気にひたすら耐えた。カップから降りた時にはもうフラフラで、未知人は手近なベンチに倒れるように座り込んだ。 「ミチト、どうしたの？ 気分悪いの？ 大丈夫？」

心配そうに顔を覗き込むエリザに、未知人は唸った。少女の顔がぐるぐる回って見える。

「回るなあああ、余計に眩暈がするううう」

「もう回ってないよ、降りたじゃない」

「うう、地球が回ってるうう、止まれええ」

エリザは辺りを見回すと、ちよつと待っててと言いついてどこかへ走って行った。ベンチに横になった未知人が唸っていると、いきなり頬に冷たいものが押しつけられた。

目を開くと、心配そうな顔のエリザとスポーツ飲料の青い缶が目に入った。ベンチに座り直した未知人は受け取ったスポーツドリンクを半分ほど飲み干し、大きく息をついた。

「大丈夫？ ミチト、ひよつとして具合悪いの？ 病気？」

「んにゃ、ただの二日酔い」

「お酒飲みすぎると身体に毒だよ」

王子様見つけた！

「しゃーねえさ。酒飲むのも仕事のうちだし。昨夜はヘルプが足りなくてよ……」

九歳の少女にホストクラブの話聞かせても仕方ないと未知人は口をつぐんだ。

残りを飲み干す間にも、ベンチの前を通る人々が好奇の視線を向けていく。外国人はもはや珍しくなくても、それが西洋人形のような美少女では人目を惹いて当然だ。

愛玩犬か何かを見たように、「まあ、可愛いわね」と囁きかわす人々もいる。返されるエリザの人懐こい笑顔には頬をゆるめる人々も、傍らの未知人を見ると一様に首を傾げた。

ブリーチした髪。革パンに蛇革ふうの靴。襟に不揃いのフェイクファーをあしらった細身のコート。指には重たげな骸骨のシルバールング。整った顔だちではあるが、口許には殴られた痕跡がくつきり……。

そんな怪しげな風体の男が、いかにもお嬢様然とした美少女のお供に相応しくないことくらい、当の本人にも容易に想像はつく。

「おい、エリザ。もし俺が未成年者略取　つまり誘拐罪とかで捕まったら、おまえちゃんと事情を説明しろよな。おまえが　花やしき　に行きたいって言ったんだからな」

「うん、わかつてる」

エリザは殊勝な面持ちで頷き、大きな碧い瞳で未知人を見つめた。「ミチトは悪くないってちゃんと説明するから大丈夫。何があっても私が守るから」

「……なあ。何でおまえ、俺のこと知ってたんだよ」

「ミチトは王子様だから」

「わけわからん！　俺は一般人だっつの」

「それでもミチトは王子様なの」

コートの合わせから引き出したペンダントを握り、エリザは自分に言い聞かせるように呟いた。よほど大事なもののなのか、乗り物に乗っている間も、時折エリザはペンダントを取り出しては小さな手

で握りしめていた。

未知人は空き缶を握り潰し、ベンチの側のゴミ箱に放り込んだ。

「ところで腹減らねえ？ 何か喰いたいもんあれば、おごってやるよ」

気がつけば、もう正午もかなり過ぎてている。エリザは真剣な顔で思案し、目を輝かせた。

「たこ焼き！」

「たこ焼きね。フードコートに行けばあるかな。俺も腹減ってきた」  
ソースと鰹節のかかった普通のたこ焼きと、青ねぎを散らして出汁をかけたたこ焼きを買い、パラソル付きの外のテーブルに座った。エリザは大喜びではしゃいでいる。

未知人はたこ焼きを食べながらぐるりと周囲を見回した。高台のテラスからは園内が一望できた。

（そう言えば、前に来たときもここでたこ焼き喰ったっけな……。）  
前と言っても相当以前、高校生の時以来だから、もう七年ほど前になる。

（……麗子、どうしてるかな。あの時大学四年だったから、もう30近いか。）

結婚して子供だっているかもしれない。いくらなんでもこれほど大きな娘はいないだろうが……。

美味しそうにたこ焼きを頬張るエリザを、未知人は楊枝をもてあそびながら眺めた。

（こいつ、いったい誰なんだ？）

会った覚えはないし、思い当たる節もない。店に外国人女性が来ることはあるから、その娘とか妹とか……なのだろうか。

（それにしたって心当たりねえよなあ。）

常連でそれらしき人物はいないし、どういうわけか自分を王子様呼ばわりする。王子系とは対極のタイプで売っていたのだが。

考え込む未知人の視界に、遊園地には似つかわしくない黒服の男が映った。ハツと思った時にはすでに遅く、背後から無理やり引き

王子様見つけた！

立てられていた。首をねじ曲げて背後を見た未知人は思わず目を剥いた。てっきり黒服一味のひとりかと思っただが、それは制服姿の日本の警察官だったのだ。

「おいエリザ、説明しろ！俺は誘拐犯じゃねーって……」  
「乱暴しないで！」

エリザはぎゅうつと未知人に抱きついた。黒服が丁重に、だが断固として少女を引き剥がす。男はどうやら最初の追っかけっことで先頭に立っていた人物らしい。サングラスをかけているので表情はよくわからないが、怒っているというよりはホツとしているようだ。

男は外国語で少女をなだめたが、少女は何やら叫びながら激しく首を振るばかりだ。業を煮やしたのか、男はバタバタ暴れる少女を肩に担ぎ上げ、私服の刑事らしき男に話しかけると大股に去って行った。

エリザは小さな拳で黒服の背中を叩きながら、未知人の名を呼び続けていた。黒服集団だけならいざ知らず、日本の警察まで出てきたのでは犯罪絡みではないのだろう。

いや、自分が犯罪者になってしまったのかもしれない。仕事をクビになったうえ警察に捕まるとは。いったいどんな厄日だ、今日は。未知人は溜め息をつき、警官に促されるままとぼとぼと歩きだした。

留置場に入れられて数時間。取り調べを受けることもなく、留置係の警官がやって来て釈放を告げた。

取り上げられていた携帯や財布とともに、銀色のペンダントを渡された。自分のものではないと言いかけて未知人は思い出した。エリザが大事そうに握りしめていたペンダントだ。どさくさにまぎれてポケットにでも滑り込ませたのだろう。

警察署の外に出ると、すでに夕方になっていた。冬の名残を留め

王子様見つけた！

た風に身震いをしてコートのポケットに手をつ突っ込むと、指先に冷たい金属が触れた。エリザが残したペンダントを、未知人はむつつりと眺めた。

（何だっただ、あいつは。）

振り回された腹立たしさからぐつと握りしめると、不意にパチンと音がして蓋が開いた。ロケットになつていたので。中には楕円形に切り取られた写真が一枚収まっていた。エリザと若い女が映っている。エリザの肩を抱いて微笑む女の顔に未知人は目を見開いた。

手にしたロケットを見つめたまま硬直していると、黒塗りのメルセデス・ベンツが目の前で止まった。助手席から降り立ったのは、黒服にサングラスの大男だ。男は後部座席のドアを開け、黒いサングラスの奥から無表情な視線を未知人に向けた。

「エリザ様がお待ちだ」

未知人はロケットの蓋を閉じ、男を睨んだ。

「俺もあのガキに訊きたいことがある」

慥然と後部座席に収まった未知人を乗せ、艶光りするメルセデス・ベンツは混み合い始めた道路を滑るように抜けて行った。

案内されたのは、とある高級ホテルのスイートルームだった。未知人などロビーにすら足を踏み入れたことがない。靴底が沈むような毛足の長い絨毯に贅を凝らした内装。未知人を連れてきた大男と同じような黒服の男があちこちに立っているのが異様と言えば異様な雰囲気ではあった。

黒服ばかりでなく、上等そうなお仕着せ姿の女性も何人かいる。髪の色はまちまちだが全員が西洋人だった。

くぐもった泣き声が聞こえたような気がして、未知人は眉をひそめた。男が重厚な造りの扉を無造作に開くと、それは途端に大きくなった。泣きわめいている少女の声だ。室内にはお仕着せ姿のメイ

ドと黒服が数人いて、いずれも困った顔で床を見下ろしている。

彼らの視線の先には、盛大に泣きわめくエリザがいた。涙と鼻水で可愛い顔を派手に汚し、コートも脱がず、全身をフルに使って転げ回り、泣きわめいているのだ。傍らには癩癩の犠牲になったとおぼしき哀れなデイベアが天井を見上げて転がっていた。

未知人を案内した黒服が、何かエリザに話しかけると、泣き声は途端に収まった。床から跳ね起きたエリザは未知人にまっすぐ走り寄り、ひしと抱きついた。

「ミチト、ミチト、ごめんなさい！」

「……おまえいつたい誰なんだ」

未知人の呟きを耳に留め、男が一喝した。

「無礼だぞ、『あなたはいつたいどなたですか』と言え！」

「てめえに日本語教わる筋合いはねえ！」

「無礼なのはおまえの方よ、ペーターセン」

エリザが顔を真っ赤にして怒鳴った。

「ちゃんと夕方までには帰るからって書き置きしたのに信用しないで追いかけてくるから、こんな大騒ぎになっちゃったんだわ」

「はいそうですかと待ってられますか!？」

ペーターセンと呼ばれた黒服は、サングラス越しにもわかるほど目と眉を吊り上げ、達者な日本語で叫んだ。

「ご自分のお立場というものを、きちんとわきまえていただかなくては……」

「何よ、アキバに行きたいっておまえが言うから一緒に行つてあげたんじゃないの。気兼ねなく楽しめるように休暇をあげたつもりだったのに」

「そんな気を回してくださなくて結構！」

「おいっ」

わけのわからないやりとりに苛立ち、未知人は叫んだ。

「俺の質問に答えてねーぞ！ おまえは誰だ、それと、何でおまえが麗子と一緒に写真に写ってんだ!？」

エリザは答えず、口を尖らせて未知人の脚にぎゅうとしがみついた。ペーターセンは溜め息まじりに首を振り、サングラスの位置を直した。

「こちらはエルフエラント王国の王女、エリザ殿下だ」

「……エルフエラント？ それって確か、ヨーロッパの真ん中辺のちっこい国だったよな。カジノで有名な」

「カジノは我が国が誇る高級リゾートの付属施設に過ぎん。我が国は豊富な温泉を利用した療養設備が非常に整っており……」

「へえ、日本に来てたんだ？」

誇らしげなペーターセンの宣伝文句を聞き流し、未知人はエリザを見下ろした。ペーターセンがむっとした顔になる。

「おまえ、新聞も読まんのか？ 我が国王陛下は、現在日本で開かれている 世界温泉・鉱泉利用計画会議 への出席のために日本を訪問中だ。エリザ様のご同伴は非公式だが」

「日本へ行ったら絶対秋葉原に行きたいってペーターセンは前から言ってたのよ。でも、警護の仕事をサポートにはいけないでしょ。だから私に付き添わせることにしたの。本当は私が付き合っただけだよ。ただだよ」

「エリザ様！」

「……オタクか、てめえは」

顔を真っ赤にしてエリザに食ってかかるペーターセンを、げんなりと未知人は眺めた。

「どうしてもミチトに会いたかったから、ペーターセンが猫耳メイドに見とれてる隙にこっそり抜け出したの。だいたい彼が悪いのよ。ミチトの働いている店に行きたいって頼んだのに、絶対ダメって言うんだもん」

「ダメに決まってます！」

（そりゃ、ホストクラブに未成年の、しかも一国の王女様を連れてくのは、いくら何でも無理だよな……。）

未知人はオタクの警護官に少しばかり同情を覚えた。しかし、ど

王子様見つけた！

うしてそうまでして自分に会いたがったのか。その手がかりを、未知人は掌に握りしめた。

「……もうひとつの質問にも答えてもらおうか。何で麗子がエルフエラントの王女様と一緒に写真に収まってるわけ？ しかも妙に親しげ。いったいどういうことだよ」

ゴホン、とペーターセンは咳払いをした。

「フロイライン・レイコはエリザ様のガヴァネスだったのだ」

「ガバ……？」

「家庭教師だ。フロイライン・レイコは日本の大学を卒業するとエルフェラントの大学に留学したのだ。ホームステイ先が王室ゆかりの貴婦人で、その縁で王女の家家庭教師のひとりとして雇われた。我が国は親日的だし、当時駐在していた日本の大使が彼女の親戚だからで身元を保証してくれたのでな。ヘル・コウサカ。もちろん知っていると思うが」

「親父だよ。俺は不肖の息子つて奴さ」

ふん、と未知人はそっぽを向いた。

「で、麗子は元気か？」

話題を逸らすつもりで言ったのだが、その途端エリザは泣きそうな顔で俯いてしまった。

「……レイコ、死んだ」

「死んだ!？」

思いがけない言葉に、未知人は愕然とした。

「そんな、何でだよ……。事故か何かか」

「いや、病気だ。スキルス胃ガンで、わかったときにはもう手遅れだったんだ」

ペーターセンが答えた。茫然とする未知人と俯いて肩をふるわせるエリザを痛ましげに見やり、彼は手持ち無沙汰にその場に佇んでいた使用人や警護官を下がらせた。どうやら彼らは日本語をほとんど解さないようだ。

エリザはソファに座ると、渡されたタオルに顔を埋め、声を殺し

て泣きだした。その傍らに座り込み、未知人はロケットの中の写真を見つめた。写っている麗子は健康そのものに見えた。弾けるような明るい笑顔。七年前とほとんど変わらない。

「フロイライン・レイコは君のイトコか？」

「……いや。もつと遠い。確か、お袋の妹の旦那の弟の娘、だったかな。親戚って言っても血は繋がってない」

麗子は教育実習のあいだ未知人の実家に下宿していたのだ。未知人の兄と姉はすでに家を離れており、両親は遠い親戚の娘を喜んで迎え入れた。未知人は以前から両親と折り合いが悪かったので、麗子の存在は気まずさを和らげるちょうどよいクッションになった。

しばらくひとつ屋根の下で暮らすうちに、闊達な性格の麗子は未知人にとって誰よりも気の置けない存在になっていった。幼い頃からエリート家族のなかで疎外感を覚えていた未知人には、血のつながりのない麗子の方が家族の誰よりも却って親しみやすかったのだ。出来のよい兄と姉は親の期待に楽々と応え、それぞれ国家工種と司法試験に一発合格。まさしく絵に描いたような完璧な家族だった。自分の居場所など最初からなかった。それは兄と姉が家を離れた後も変わらなかった。

「レイコ、この写真をすごく大事にしてた」

鼻声で呟き、エリザが写真立てを差し出した。そこには満面の笑顔の麗子と照れたような仏頂面の未知人が写っている。背景は遊園地。花やしきだ。七年前、実習が終わって大学に戻る麗子にせがまれ、ふたりで訪れた。その時、麗子の持っていた使い捨てカメラで撮った写真だ。

未知人にも送ってくれたが、机の抽斗にしまい込んだまま未知人は翌年家を飛び出した。以来、家には戻っていない。自分のものなど、もう何ひとつ残ってはいないだろう。

「……こんなもの、後生大事に持ってやがったのかよ」

「写真見て、私がこのひと誰って訊いたら、王子様なんだってレイコが言ったの。王子様は行方不明なんだって。日本へ帰ったら探し

王子様見つけた！

に行くって言った。どうしてももう一度会いたいんだって……。でも私、レイコに側にいてほしかったから帰らせなかった。そしてレイコは病気になって……。それで……」

未知人は無言でテーブルの上からティッシュスーパーを取り、エリザの顔に押しつけた。エリザは鼻をかみ、ティッシュに顔を埋めたまま囁いた。

「だから私、レイコの代わりに絶対ミチトを探し出そうと決心したの。ペーターセンに頼んで日本で探偵を雇って……。やっと見つかった。レイコの王子様、やっと見つけた」

「……そんな柄じゃねえよ俺は。王子様だなんて、ただの冗談さ。おまえが本当の王女様だから、ふざけたんだ」

「違う。ミチトはレイコの王子様だったの。レイコは言った。今どき座して王子様が現れるのを待っていてはダメですよって。白馬に乗って王子様を探しに行きましようって」

未知人はソファの背に凭れかかった。

「……はは。あいつらしいや」

しみじみと呟き、未知人は俯いているエリザの頭を掌でぼんとたたいた。驚いて見上げる少女に、未知人はぎこちなく微笑んだ。

「ありがとよ。もう泣くな」

エリザは泣きぬれた碧い瞳を睨り、ぎゅっと未知人に抱きついたのだった。

「ミチト！」

弾んだ声を上げてエリザが走ってくる。

「早く早く。明日は帰国だから、今日中に行きそびれてたところへ行っておかないと」

「はいはい。で、どこへ？ お姫様」

エリザは伸び上がって耳打ちをした。急ぎ足で後を追いなから、

王子様見つけた！

ペーターセンが尋ねる。

「どこへ行かれるおつもりだ？」

「執事カフェだよ。エルフェラントも日本のオタク文化にそうとう毒されてるな」

未知人の皮肉にペーターセンは顔を赤らめ、落ち着きなくサングラスを直した。

『王子様見つけた！』おわり

(後書き)

投稿結果：コバルト短編小説新人賞【選外】

王子様見つけた！

王子様見つけた！

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2808e/>

---

王子様見つけた！

2009年3月24日09時50分発行